

## スウィフトの生涯 (Ⅱ)

### スウィフトの初期の詩

#### 三 浦 謙

スウィフトが25, 6歳の時に制作した詩が今日、6篇残っている。その中、4篇はカウリー<sup>①</sup>を模したピンダロス風の頌詩<sup>②</sup>であり、残る2篇は2行ずつが韻を踏んで対句をなす英雄詩格の詩である。

頌詩は次の四篇である。

- 〔Ⅰ〕 Ode to the King on his Irish Expedition
- 〔Ⅱ〕 Ode to the Athenian Society
- 〔Ⅲ〕 Ode to the Honourable Sir William Temple
- 〔Ⅳ〕 Ode to Dr. William Sancroft

〔Ⅰ〕はボイン河の戦い<sup>③</sup>でのウイリアム三世の勝利を讃える詩である。1690年7月、遠征軍を率いたウイリアム三世とフランスから七千の援軍をえたジェームズ二世が、ドロイダーから3マイル北のボイン河で会戦し、ジェームズ軍は潰滅的な打撃を蒙る。ジェームズ二世は敗北を認めて、ただちにアイルランドを出国するが、戦乱はその後1年余り続き、1691年9月フランスの実質的援助が絶たれて、アイルランドの勇将サースフィールド<sup>④</sup>がリマリックで降服した時点で終結する。

この戦いで、アイルランドの国教徒は、イングランドと結んでウイリアム三世に従ったが、カトリックはフランスと連合してジェームズ二世の指揮下にあった。ウイリアム三世の戦勝により、この戦い以降十八世紀を通じて、国教徒プロテスタントがアイルランドで支配的な地位を占めることになる。

スウィフトは、この詩でウィリアム三世を神格化し、その剛勇な気質が、もっぱら士気を高めて、戦いを勝利に導いたとしている。

これにひきかえ、ジェームズ二世は、厚かましくも大天にまでその勢威を伸ばそうとする不穏な暴君ときめつけ、ジェームズ二世の後楯のフランス王は、アキレスのように毒矢で踵に致命的な傷を負ったにちがいないと憫笑している。

〔Ⅱ〕はスウィフトの存命中に活字になった最初の詩である。スウィフトは、このオードに手紙を添えて、妥当でないところは手を加えて構わないから、どうか掲載してほしいとアテネ協会<sup>⑥</sup>に懇願している。1692年の初めスウィフトの願いがかなって、アテネ協会の機関誌アセニアン・ガゼット<sup>⑥</sup>第5巻の付録に、この詩は収められた。アセニアン・マーキュリー<sup>⑦</sup>ともいわれたアセニアン・ガゼットは、1691年3月17日から1697年6月14日にかけて出版された週報で、郵送されてきた各種の問題の質疑にすべて答えるという仕組みになっていた。出版元はジョン・ダントン<sup>⑧</sup>である。アテネ協会というのは、ダントンとその2、3の協力者を指している。スウィフトはウィリアム・テンブルがダントンのパトロンの一人で需めに応じて寄稿していたところから、この刊行物に関心をもつようになっていた。詩人ジョン・ドライデンは、この詩を読んで、「いとこのスウィフトよ、きみは決して詩人にはなれない<sup>⑨</sup>」といったといわれている。祖父トーマス・スウィフトの妻の旧姓がエリザベス・ドライデンであった点からもわかるように、スウィフトとドライデンは姻戚関係にあった。スウィフトは、この一件があってから、ドライデンを永く怨むようになった。

この詩の表題は、Ode to the Athenian Society だが、詩の中でアテネ協会への言及はない。スウィフトが、ここで、もっぱら問題にしているのは、大半が愚物である人間のあさましさであり、豊饒な詩語をもってしても、人間の愚行や気紛れや矛盾を表わす文飾に近年は戸惑うといっている。諷刺家としての萌芽がこの詩にうかがわれる。

ところで、スウィフトを酷評したドライデンだが、サミュエル・ジョン

ソンは『詩人伝』の中で次のようにいっている。

彼にとって好ましい精神の働きは推論にある。彼は論証と詩を結びつけた最初の詩人といっている<sup>(10)</sup>。

ドライデンは革新を嫌い、奔放な自由律の詩型を好まなかった。エリザベス朝やジェームズ一世朝の劇作家の作物を機知の浪費とみていたドライデンには、カウリー風の規格外れの詩は認められなかったのだろう。ドライデンの血脈を受けついでいるポープもスウィフトの初期の詩には高い評価は下していない。

〔Ⅲ〕では、

… purchase Knowledge at the Expence  
Of common Breeding, common Sense  
And grow at once Scholars and Fools;

(42—44)

教養と常識を犠牲にして

知識を買いもとめ

学者になると同時に愚者になりはてている

術学者を嘲弄しながら、恩顧をうけたウィリアム・テンプルを、次のように無際限に讃えている。

Those mighty Epithets, Learn'd, Good, and Great,  
Which we ne'er join'd before, but in Romances meet,  
We find in you at last united grown.  
You cannot be compared to one,  
I must, like him that painted Venus' Face,  
Borrow from every one a Grace;  
Virgil and Epicurus will not do,  
Their courting a Retreat like you,  
Unless I put in Caesar's Learning too.  
Your happy Frame at once controuls

This great triumvirate of Souls.

(59—69)

「学識があり」「誠実で」「高貴である」という三つの重味のある形容語は、  
 中世の騎士物語このかた結び合わされることはなかったが、  
 とうとう、あなたが、この三つを結実させた。  
 あなたを一人のひといちにんにたとえることはできない。  
 私は、ヴィーナスの顔を描いた画家のように、  
 あらゆる人から美点を借用しなければならない。  
 ヴァージルとエピキュラスだけでは不十分である、  
 彼らは、あなたのように隠栖をもとめはしたが、  
 私はシーザーの学識をも加えなければならない。  
 あなたの恵まれた体軀は、同時に、  
 この三つの魂を掌握する。

これは、賞揚というよりは阿諛であろう。

〔IV〕は、名誉革命における暗黙の原則——一つは、聖別された国王を国民が廃位できるということ。二つには、教会は国家に服し、その管理下に置かれるということ——に賛同できず、ウィリアムとメアリーへの忠誠を拒否したために、1689年に停職、1690年に罷免、1691年には、遂に追放処分になったカンタベリー大司教ウィリアム・サンクロフト博士への頌詩である。スウィフトはサンクロフト博士を衷心より敬慕していた。2、3年前から、スウィフトはエリーの司教フランシス・ターナー<sup>(11)</sup>の要請をうけ、サンクロフト博士を主題とする詩作の構想を折に触れて練っていた。結局、構想半ばで筆を執り始め、1692年12節迄進んだところで、未完のまま筆を擱いた。スウィフトは同年5月3日付のいとこトマス・スウィフト宛の書簡で、この詩を手がけて5ヶ月になるが9節しか出来てないのに、その中の半分は気に入らない。まだまだ、とても仕上がりそうもないと述べている。Ode to the Athenian Society は1週間で草稿を書き2日

で仕上げたので、スウィフト自身、苦吟するほうではないといっているが、この詩にかんしては相当難渋していた模様である。

スウィフトは、この頌詩で、まずサンクロフトへの批判が何故誤るようになったかを説く。

Here a pale shape with upward footsteps treads,  
And men seem walking on their heads;  
There whole herds suspended lie  
Ready to tumble down into the sky;  
Such are the ways ill-guided mortals go  
To judge of things above by things below.

.....

.....

No wonder, then, we talk amiss  
Of truth, and what, or where it is:

(33-42)

この地上では青白い幽霊が足跡を虚空につけ  
人間は逆立ちして歩いているかのようだ。

そして群集は中吊りのまま

天空にころがりこもうとする。

道を誤った人間が下部のものによって

上部のものを判断しようとするれば、かかる有様になる。

.....

.....

そのさい、真実とはなにか、その所在を話題にするとき  
誤るのは当然である。

このような愚かな人間には、

... holy Sancroft's motion quite irregular appears,  
Because 'tis opposite to theirs.

(81-82)

高德のサンクロフトの行動は全く異常に見える。  
 彼らの行動に逆行するから。

ここで、スウィフトはサンクロフトと同じく、教会が国家に服するのを  
 疑問視し、サンクロフトの退陣はやむなしとしている。

Say, why the Church is still led blindfold by the State?  
 Why should the first be ruin'd and laid waste,  
 To mend dilapidations in the last?

.....

.....

And divine Sancroft, weary with the weight  
 Of a declining Church ...  
 Finding the Mitre almost grown  
 A load as heavy as the Crown,  
 Wisely retreated to his heavenly rest.

(177—189)

では、なぜ目隠しされたまま、教会はいぜん国家にひきずられるのか。  
 なぜ後者の荒廃を修復するため  
 前者を廃墟にしておくのか。

.....

.....

聖なるサンクロフトは、  
 衰退する教会の重みに疲れはて、  
 司教の冠も王冠同様  
 重荷となったので、  
 賢明にも隠栖して、天上の安らぎを得ることにした。

そして、未完の最後の十二章では、宗教の現状を次のように慨嘆してい  
 る。

Religion now does on her death-bed lie,

Heart-sick of a high fever and consuming atrophy.

(251—252)

宗教は、今や、高熱と萎縮による憔悴で  
心臓をわずらい、死の床にある。

以上、4篇は1692年の前半の制作と推定されている。以後1693年の末迄スウィフトの制作した詩は今日残っていない。同年の11月および12月に、スウィフトは次の2篇をものしている。

〔Ⅰ〕 To Mr. Congreve

〔Ⅱ〕 Occasioned By Sir William Temple's  
Late Illness And Recovery

〔Ⅰ〕 コングリーヴはスウィフトより2歳年下で2人はキルケニー・スクールの同窓であった。また、2人は3年の間隔を置いてダブリンのトリニティ・カレッジにそれぞれ入学している。スウィフトは1682年4月24日、コングリーヴは1685年4月5日である。そして、2人は共に同じ指導教官セント・ジョージ・アッシュ<sup>(12)</sup>についている。

スウィフトがウィリアム・テンプルの書生を勤めていた1693年の1月には、コングリーヴは、第1作『独身老人<sup>(13)</sup>』を上演し喝采を博していた。そして、同年の10月には、第2作『二枚舌の男<sup>(14)</sup>』を上演している。スウィフトがコングリーヴへの詩を書いたのは、その翌月である。コングリーヴの第2作は第1作と違って批評家から好評をもって迎えられなかった。スウィフトはコングリーヴの才能を認め、次のように芝居の不評を慰めている。

By hopes my Congreve will reform the stage;  
For never did poetic mine before  
Produce a richer vein or cleaner ore;

(50—52)

できることなら、コングリーヴは芝居を改革しようとしている。  
 これまでに、いかなる詩的鉱山も、  
 これほど豊かな鉱脈や、これほどきれいな鉱石を生みだしたことはない。

Those who by wild delusions entertain  
 A lust of rhiming for a poet's vein,  
 Raise envy's clouds to leave themselves in night,  
 But can no more obscure my Congreve's light  
 Than swarms of gnats, that wanton in a ray  
 Which gave them birth, can rob the world of day.

(77-82)

はげしい妄念から、詩人の鉱脈を狙って  
 作詩の願望を抱くものは  
 嫉妬の雲を起して、自身は夜の闇にまぎれるが、  
 もはやコングリーヴの光をおおい隠すことができないのは、  
 この地上に送り出してくれた母なる光線の中を戯れて飛び廻るユスリ  
 カの群が  
 この世から日の光を奪いとることができないのと同じことだ。

〔Ⅱ〕は奇怪な詩である。前半では、詩神が現れて、テムプルの病気回復を祝わないスウィフトを叱るが、表題とは裏腹にテムプルの病気に関わる場所は全体の5分の1に満たない。(37-66)

しかも、その個所でも、テムプルの病状やその回復ぶりには触れずに、テムプルの妻やテムプルの妹であるレイディ・ジファードが抱いている一家の主人<sup>あるじ</sup>の病気への懸念に終始している。

後半は、スウィフトを叱った詩神への回答である。だが、詩神のいましめに従ってテムプルの病気回復を祝うどころか、効ない名誉や尊敬をスウィフトにもとめさせたといって、詩神を攻撃する。最後には、詩神は幻影に過ぎないときめつけて、詩神と決別する。詩神とはスウィフトの庇護者であり、学芸全般にわたってスウィフトの範となっていたテムプルその人でもある。



若年期のスウィフトの最後の詩が、このように詩神と袂をわかつことで終わっているのは印象的である。ムア・パークでスウィフトに強く失意の感を抱かしめたのはテムプル邸での処遇の問題というよりは、むしろ、詩人としての才能の乏しさを自覚した点にある。

若年の頃から詩人を志していたスウィフトは、最初、ピンダロス風の頌詩を試みてドライデンから痛罵を浴びた。スウィフトが英雄詩格の詩の制作に転じたのは、ピンダロス風の奔放な詩形よりは、古典的な規格を尊重する時代の好尚に合わそうという意図に加えて、ドライデンの手酷い批判を受けたスウィフトが、別の詩形で、みずからの才能を試したいという気持が手伝ったからでもあろう。しかし、いずれも、スウィフトの納得する形で実を結ぶことはなかった。

スウィフトは、以後5年ほど詩作から遠ざかる。そして1698年頃から再び詩の制作にとりかかるが、この時期からは、様相を一変しもっぱら諷刺詩を手がけるようになる。

#### 注

- (1) Abraham Cowley (1618-67).

詩人。代表作“Love’s Riddle” “The Puritan and the Papist”. チャールズ一世の熱烈な支持者だった。

- (2) Pindaric ode. ギリシャの詩人 Pindar が好んだ凱旋歌風の無定形の頌詩。

- (3) the Battle of the Boyne 1690.

- (4) Patrick Sarsfield 生没年不明。

- (5) (6) the Athenian Society.

the Athenian Gazette.

- (7) the Athenian Mercury.

後、the Athenian Oracle という名称に変わった。

- (8) John Dunton (1659-1733).

出版も手がけていたロンドンの書店主。

野心家で、その事業の盛衰は“Dunton’s Life and Errors” という自伝にくわしい。

- (9) Cousin Swift, you will never be a poet.

- (10) The favourite exercise of his mind was ratiocination;……

It may be maintained that he was the first who joined argument with

poetry.

(11) Bishop of Ely, Francis Turner (1638–1700) .

(12) St. George Ashe (c. 1658–1718) .

後年. Clove, Clogher, Derry の司教を歴任する。

(13) “The Old Bachelor. A Comedy” 1693.

Hartwell という似而非女嫌いの老人が、ひそかに女の元に通う話。恋愛遊戯的な一種の風習喜劇。2週間続演され、当時としては大成功だった。

(14) “The Double Dealer. A Comedy” 1694.

筋が複雑で面白味に欠け、「独身老人」のように好評をもって迎えられなかった。